

# Cover Presentation

表紙  
プレゼン  
テーション  
シヨ

## 学都のシンボル、第四高等学校本館 日本の近代建築史上、重要な遺構



### 石川四高記念 文化交流館 (金沢市)

**長** く石川近代文学館として親しまれた四高本館が昨年、石川四高記念文化交流館としてリニューアルされた。四高記念館が館内に併設され、名実ともに四高を記念する建物となった。雑誌『学都』では創刊号から何度か、学都金沢のバックボーンとしての「四高」を取り上げてきた。30号の節目を迎え、改めて表紙に四高記念館の名前を持つ四高本館をとりあげることができたことは感慨深い。

文部省主導で計画されたかつての「官制学校」の典型であり、明治期の日本人建築家による本格的洋風建築として、日本の近代建築史学上においても重要な遺構である。

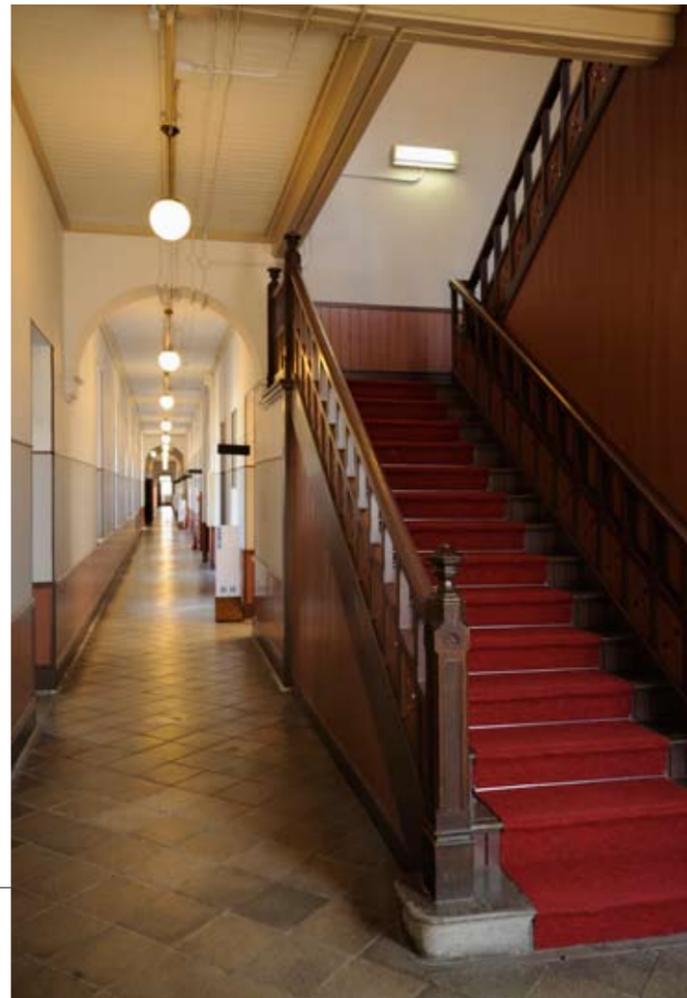
金沢に現存する煉瓦造建築には、四高本館のほかに、陸軍兵器支廠（石川県立歴史博物館）、金沢専売公社工場（金沢市玉川図書館近世資料室）などがある。それぞれの立面構成の違いが興味深い。金沢専売公社工場は、一、二階の窓を一体化して取り込んだ煉瓦の凹凸あるパターンが陰影を作り出しており、味のある表情をもった建物となっている。これに対して、四高本館は窓以外、壁面の出入りのないフラットな壁面となっている。巧みな設計はその単調さを、二階アーチ窓上部の要石を白と茶のストライプに並べ、一、二階の床面に白煉瓦で白線を走らせることで救っている。モダンでシャープな格調ある建物として目に映る秘密がここにある。

松本 大  
Text by MATSUMOTO Dai  
建築家  
都市環境マネジメント研究所 研究員  
松本大建築設計事務所 代表

抑制された静謐な壁面構成に対して、正面入口キャノピーの鑄鉄製の柱、上部の透かし文様入りの柱頭飾りは、流麗で華奢な表情を見せている。建物本体に対比され、入り口の華やかさを演出している。

四高記念館展示室に、往時の四高キャンパスの模型がある。これを見ると、現存する四高本館の背後に教室棟、寮が建ち並んで接続している。なかなか壮大なもので、さながら大寺院の伽藍のようだ。模型の寄贈者名も正力松太郎とあり、四高出身者の人脈の拡がりを感じさせる。

考えてみると、これだけのキャンパスが街なかに在ったことによる、金沢の市中の賑わいはどれほどのものだったろう。街の中心部の繁華街に隣接した場所に、学生たちが学び、住まう。学生たちは街に繰り出し、飲み喰う。街と交歓し、街に育てら



れる。

現在、四高跡地（中央公園）から県庁跡地までの一体となったエリアが、緑豊かなオープンスペースとして整備されようとしている。旧県庁舎も新たな交流の場として生まれ変わるろうとしている。四高本館はその中で、変わることなく、学都・金沢のシンボルとして在り続けることだろう。そして、できるなら、かつて青雲の志を抱いた四高生たちが街と

交流したような賑わいが、このエリアに帰ってくることを願いたい。

#### メモ 旧第四高等学校本館

明治22年6月着工、24年7月竣工。文部技師山口半六、久留正道設計。

屋根は寄せ棟造り。外観は腰回り、軒周りに釉薬煉瓦や白煉瓦を用い、壁面の赤煉瓦とのコントラストを形づくる。屋根には、棟飾りや雪止めの金物をのせ、煉瓦造りの煙道が変化を与えている。昭和44年国重要文化財指定。明治中期以降の学校建築の源流を示す貴重な遺構である。